

と心をあげけけのやうく志氣をみまゆ
 すみしけり望てむらうたうらきるまは
 ひまきるふの心をいふ乃あはれいふ
 乃あはれいふとひらひのいさるあな
 一あきハゆふくれ夕日何かやう
 きもいさちのくあまうらにわら
 とて三例の所ちをと飛けり所人
 一唐なと此はく孫きうのいさち
 一日入をてくう登此ととひ一乃
 ゆきれ少りたふをいふへ東あき
 いとち海を又いふてもいとさび
 志とまをてわらぬいとつあくし
 あをてぬるをゆるひりてゆけ
 乃あはれいふとひらひのいさるあな

はるはあけぼの曙 やうくし白くなりゆ曙く山ま際やま山ぎ際は

す明こしあかりて む紫らさまたちたる 雲細のほ細く たな

びきたる。 な夜つはよ夜る 月頃のころは さ闇らなり や闇みも

なを ほ虫たるとび飛ちがひたる あ雨めなどの ふ降るさへ お

かし **あタきはゆ暮ふ暮べれ** 夕華日はな華やかにさ華して 山

き際は い近ちか近くなりたるに からす震のね所ごころへ 行

とて みつ白よ白つ ふ白たつ白なと 飛白行白さへ あ白は白ね白なり ま白し

て鷹連などのつ連らねたるが い小ちい小さく見ゆる い小と

おかし 日果入果はてゝ か風ぜ音のをと む虫しのね音なと **ふ音ゆ音は**

ゆ音きのふ降りたるは い云ふ音べき音にもあ音らず し音もな音どの

いと白ころ白ひ白く、又寒さら寒でもいと寒む寒き 火起などい起そ起む起お起い

して す炭み持も持てわたる い風と風し風き風く風し ひ風る風い

なりて ぬ緩る緩へ緩ぬ緩る緩び緩も緩てゆ緩けば す火ひ火つ火火火お火け火の火ひ

第一段（現代語訳）

春はあけぼの（がよい）。じよじよに白くなつてい
く、山ぎわ「山に接している空」が少し明るくなつ
て、紫がかった雲が細くたなびいている（その景色が
よいのだ）。

夏は夜（がよい）。月が明るいころ「満月のころ」
は言うまでもなく、闇のころ「新月のころ」であつて
も、ほたるが飛びちがつている（その光景がよいの
だ）。また、ただ一匹二匹などと、ほのかに光つて飛
んで行くのも趣がある。雨などが降るのもよい。

秋は夕暮れ（がよい）。夕日がさして山の端にたい
へん近くなつているところに、からすがねぐらへ行こ
うとして、三羽四羽、二羽三羽などと飛び急ぐ、そん
な様子さえもしみじみとした情趣がある。まして、雁
などの連なつて飛んでいるのが、非常に小さく見える
のは、たいへん趣が深い。日が暮れてから聞こえてく
る、風の音や虫の声なども、また言うまでもないこと
である。

冬は早朝（がよい）。雪が降っている朝は言うまで
もなく、霜がたいへん白い朝も、またそうでなくて
も、非常に寒い朝に火などを急いでおこして、炭を
持って運びまわるのも、たいへん似つかわしい。（し
かし、）昼になつて、寒さがゆるんでくると、火桶の
火も白い灰がちになつてよくない。